

現代美術館の展示空間構成に関する研究

Research on the display space constitution of museum of contemporary art

○島田遥¹, 佐藤慎也²*Haruka Shimada¹, Shinya Satoh²

The contemporary art is becoming closeness of people. In late years the work of an art festival held as a part of the citizen-based town planning in a district and an art project performed in an urban area does not need the box called the art museum. For such a problem, I grope for it about the way of future Museum of Contemporary Art. A purpose of this study is to understand the influence that the display space of the art museum gives a work by clarifying the tendency about constitution of the display space of Museum of Contemporary Art. By a study investigation, I grasped a form, an area, height from a plane, section plan, and it broke it that the tendency of the white cube was strong. It is thought that it is difficult for a lot of architect and things made in cooperation with a writer to find a characteristic of the space in the display space doing plan display in the display space doing a special form.

1. 序論

1-1. はじめに

近年、現代美術は人々の身近なものになりつつある。町おこしの一環として、地方で行われている芸術祭や、都市部で行われているアートプロジェクトの作品は、より人に密着したものになっている。これらのプロジェクトでは、その土地に根ざしたアート「サイトスペシフィックアート」が生み出される事が多い。現代美術には、このような個別の条件や歴史性、環境を重視し、自らの展示に見合った固有の「場所」へと向かう動きがあり、それらの作品は美術館という箱を必要しなくなっている。このような問題に対して、今後の現代美術館のあり方について模索する。

1-2. 研究目的

本研究の目的は、現代美術館の展示空間の構成について、その傾向を明らかにすることで、それぞれの美術館にしかないその空間の特性を探ることである。現代美術特有のサイトスペシフィックアートとよばれる「場所性」を求める作品は、芸術祭などの野外に展示されているものがほとんどである。展示空間は、均質な空間が求められるのが一般的であるが、人工の空間の中に「場所性」を探ることが、この研究の目的である。

2. 研究背景

2-1. 現代美術館および展示空間の定義

現代美術は、モダニズム以降に出現した美術の総称である。現代美術と近代美術の間には、不変の時代区分の境界が設けられておらず、現代美術の定義は、正確には定まっていない。よって、現代美術館の定義も

また定まっていない。本研究では、名称として「現代美術館」と名乗っているものを現代美術館と定義する。また、本研究では、用途として展示室と名称のついていない空間を展示空間と定義し研究を行う。

3. 研究概要

3-1. 研究方法

1970年から2011年までに、「新建築」に掲載された、現存する現代美術館の展示空間を研究対象とし、展示空間ごとの調査を行う。

3-2. 研究対象

研究対象は、現代美術館として建設された12作品の展示室計67室とする。12作品のうち6作品が私立美術館である。本研究は、現代美術館の「展示空間」を調査する事に重点を置いているため、複合施設内に付属する現代美術ギャラリーなどは、他の所要室に影響され展示空間に重点をおいていないとみなし、また近代・現代と両方を展示する美術館などは、現代美術に対して計画された展示空間でないものとみなし研究対象外とする。

表 1 研究対象作品リスト

名称	竣工年	設計	展示室数
池田20世紀美術館	1975	井上武吉研究所	3
軽井沢高輪美術館	1981	菊竹清訓建築設計事務所	7
ハラミュージアムアーク	1988	磯崎新アトリエ	3
広島市現代美術館	1989	黒川紀章建築・都市設計事務所	8
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	1991	谷口建築設計研究所	3
直島コンテンポラリーアートミュージアム	1992	安藤忠雄建築事務所	3
奈良町現代美術館	1994	磯崎新アトリエ	3
東京都現代美術館	1995	柳澤孝彦+TAK建築・都市計画研究所	7
金沢21世紀美術館	2004	妹島和世+西沢立衛/SANAA	17
十和田市現代美術館	2008	西沢立衛建築設計事務所	9
李禹煥美術館	2010	安藤忠雄建築事務所	3
豊島美術館	2011	西沢立衛建築設計事務所	1

1: 日大理工・院(前)・建築、Graduate Student, Dept. of Architecture, CST., Nihon-U.

2: 日大理工・教員・建築、Assoc. prof., Dept. of Architecture, CST., Nihon-U.

3-3. 研究内容

3-3-1. 平面・断面計画

展示空間を構成している基本的な要素として、平面と断面の計画平面計画の要素として「形態」「床面積」、断面計画の要素として「形態」「天井高」、それぞれ分類分けを行い、その傾向を調査する。断面形態も同様に分析する。主に、短手方向の断面形態を分析する。

	長方形	多角形	円形 (曲線)	直線+曲線
基本形態				
実例				
	ハラミュージアムアーク	池田 20 世紀美術館	金沢 21 世紀美術館	奈義町現代美術館
説明	角度 90° で直線が四辺ある形態	長方形以外の曲線のない形態	直線のない形態	直線と曲線両方で作られた形態

図 1 平面形態の分類

4. 分類分析

4-1. 平面計画

4-1-1. 平面形態

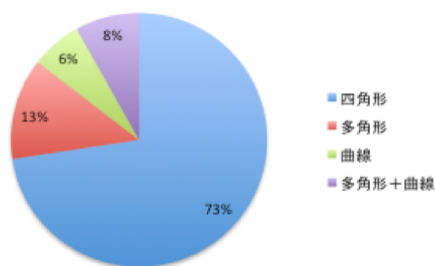


図 2 展示室の平面形態の割合

全 67 件中 51 件が長方形であり、全体の 73% 占めていることがわかる。また、全 67 件中、金沢 21 世紀美術館は 16 件、十和田市現代美術館は 9 件、合わせて 25 件が同じ長方形の平面形態の展示空間になっており、一つの美術館で同じ形態の展示空間が続く傾向があり、長方形が多くを占めることがわかった。

4-1-2. 床面積

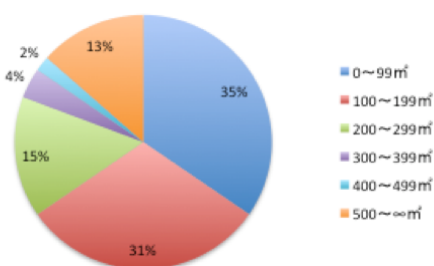


図 3 展示室の床面積の割合

0~100 m²が 35%、100~199 m²が 31%と占めており、0~199 m²が 66%占めていることがわかる。現代美術は作品形態が平面だけではなく、立体作品が増えた事で、一つの展示室にひと作品といった展示方法が増えたからだと考えられる。

4-2. 断面計画

4-2-1. 断面形態

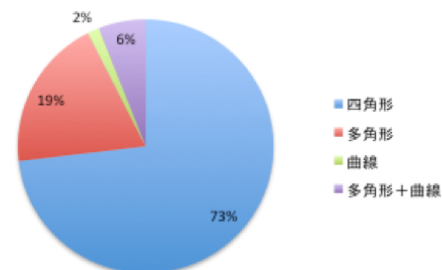


図 4 展示室の断面形態の割合

断面形態の場合、長方形が 73%を占めている事がわかる。この事から、現状では、ホワイトキューブが主流に成っている事がわかる。また、曲線は奈義町現代美術館の展示室「太陽」の展示空間のみであった。

4-2-2. 天井高

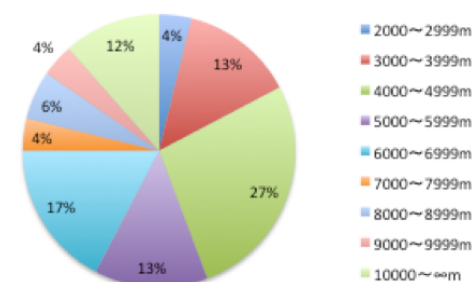


図 5 展示室の天井高の割合

5. 考察

平面と断面の分析結果から、形態は 7 割以上がホワイトキューブであることがわかった。また、天井高の割合は分散しており、10000m 以上が 12%あることから、これは現代美術が、立体作品が増えた事からつくられた高さである事が分かった。

特殊な形態をする展示空間には、建築家と作家と共同でつくられたものが多く、企画展示などをする展示空間に空間の特性を見いだすことは、難しいと考えられる。

6. 参考文献

- [1]磯崎新：造物主義論, 鹿島出版会 1996 年.
- [2]並木誠士・中川理：美術館の可能性, 学芸出版 2006 年.